

とっておきの音楽祭 in Machida

“心のバリアフリー”目指し 700 人がパフォーマンス

2019年6月22日掲載



「とっておきの音楽祭 in Machida」の様子

障がいのある人もない人も一緒に音楽を楽しんで、“心のバリアフリー”を目指す音楽祭「とっておきの音楽祭 in Machida」が2019年5月26日、町田駅周辺の「カリヨン広場」「町田シバヒロ」「町田ターミナルプラザ市民広場」「ぽっぽ町田」「まほろ座 MACHIDA」の五つの会場で開催され、音楽、ダンス、演芸、大道芸などのパフォーマンスが繰り広げられました。

とっておきの音楽祭は2001年に仙台で始まり、宮城県をはじめ、秋田、山形、福島、盛岡、熊本、鹿児島、大阪、兵庫など全国16カ所以上に広がっています。町田では、仙台でのとっておきの音楽祭に出演した町田在住のミュージシャンが「町田でやる」と手を上げ、2016年10月に首都圏で初の開催地となり、今年で4回目となります。

今回は、5会場で73組700人以上の人々がパフォーマンスを披露。初の試みとして、カリヨン広場から原町田大通りまでをステージの出演者や桜美林高校、日大三中学・高校の吹奏楽部、沖縄の伝統芸能「エイサー」のチーム「町田遊星」、特殊詐欺防止を訴える「ダ



カリヨン広場から原町田大通りまで
練り歩く「とっておきのパレード」

メ！ダメ！ソング」を作った町田のシンガー・ソングライター、彩シヨルさんや警視庁のピーポくんなどが練り歩く「とっておきのパレード」を実施。町田シバヒロでは、町田市近隣の福祉作業所の手づくり品や地元のグルメなどを提供する「とっておきのマルシェ」も開催されました。



町田シバヒロで開催された「とっておきのマルシェ」(左)と「こぼと会ダンスマン」の青木陽平さん(右)

カリヨン広場で DA PUMP の「USA」などのダンスを披露した「こぼと会ダンスマン」の青木陽平さんは「ダンスはばっちりで、楽しかった」と満面の笑顔を見せ、母の喜重子さんは「踊りはつたないかもしれませんが、お客さんの拍手をもらえて普段の練習とは見違えるぐらいはつらつと踊っていました」とうれしそうに話しました。

絵画教室「ポプラ」で絵を学んでいる細谷英生さんは、音楽祭で販売されるノートの表紙に花の絵が採用され、「うれしい」と話し、ステージでは「エイサーがよかった」と楽しんでいました。



絵画教室で絵を学んでいる細谷英生さん(左)とボランティアの川口明生さん(右)

ボランティアとして1回目から毎回参加している川口明生さんは「ステージでは手話通訳もあるので、障がいのあるなしに関係なく、みんな一緒に盛り上がる。毎回ボランティアとして関わっているが、様々な年代の人や町田だけでなく他の地域の方もボランティアとして参加しており、ボランティア同士の交流もあって、非常に楽しい。気軽に参加できるので、町田の人にもっともっとボランティアになってほしい」と語りました。

カリヨン広場で行われたグランドフィナーレのステージでは、「とっておきの音楽祭 in Machida」のテーマソング「とっておきのカーニバル!!」と音楽祭の共通テーマソング「オハイエ」が手話付きで披露され、出演者と観客が一つになって手話をしながら声を合わせて歌い上げました。「とっておきのカーニバル!!」を手がけた市内在住のミュージシャン龍さんは「他の〇ごと大作戦の取り組み(まあい体操)にも関わっていて、今回も〇ごと大作戦のおかげでこれまで以上に多くの団体に協力してもらえた。パレードも実現でき、このつながりを大切にして、音楽でバリアフリーを目指していきたい」と手応えを感じていました。



グランドフィナーレでテーマソングを披露するミュージシャンの龍さん(写真中央)

「とっておきの音楽祭 in Machida」の安田昇司実行委員長は「商店街や警察など関係者のご協力ですべての取り組みとなるパレードが無事にできて本当によかった。いつもの街がライブスペースになり、通りがかった人が足を止めて演奏を聴いてくれる。そして、障がいがある人もない人も、誰もが歌い演奏を楽しみ、見ている人も出演者が一生懸命歌い演奏する姿を楽しんでもらい、そして音楽のチカラで心のバリアフリーの実現につなげたい。そのためにも音楽祭を継続させていくことが大事だと思う」と話していました。



「とっておきの音楽祭 in Machida」の安田昇司実行委員長

「とっておきの音楽祭」の様子



